

「戦争と平和！」 第27回(最終回)

米中新冷戦時代の人種・民族問題を憂う！

玉上 佳彦

かつての米ソ冷戦とは全く異質の米中新冷戦の時代が到来している。旧冷戦時代は、米ソの軍拡競争の様相を呈しており、キューバ危機などの一触即発の危険な状況があった。しかし、最近の米中対立は、核を中心とした軍事力だけでなく、宇宙、サイバー、AIなどの技術を駆使した科学技術戦争に突入していると思われる。政治体制の全く異なる二大国の技術を背景にした未知の戦争が心配されている。

その二つの大国の政治体制は全く異質だが、危惧せざるを得ない大きな人種・人種・民族問題を内包しているのは偶然だろうか。これに対するアメリカ、中国という異なるタイプの大国の独裁的政権による強引な政治手法には危惧を感じざるを得ない。



アメリカの人種問題

「Black Lives Matter」に象徴される黒人差別は、アメリカ建国以来の根源的な問題であり、トランプ大統領の白人至上主義により問題を更に煽り立て、黒人だけでなくヒスパニックやアジア系国民への差別も拡大している。これらの国内問題を抱えながら、アラブ諸国に波紋をなげかけるアメリカの対イラン政策やイスラエル寄りの姿勢は更に不安材料を投げかけている。バイデン政権でどう変わるかを見極めたい。

中国の民族問題

中国にとって、ウイグル族、チベット族、モンゴル族、朝鮮族などの民族の中国化（漢民族化）政策は、明らかな人権抑圧であり、独自の文化を破壊するものとして、目に余るものがある。香港の国家安全維持法に見られる一国二制度の形骸化に象徴される強引な統制は、更に、台湾の一国二制度化をも目論んでいる。習近平政権は内政干渉だと主張しているが、その中国と密な関係にあるロシアのプーチン政権も不気味な存在感を示している。

ロシアと旧ソ連邦との軋轢

日本から遠い国である為あまり知られていないが、ウクライナ、アルメニア、アゼルバイジャン、チェチェン、グルジアなどの旧ソ連邦諸国内での民族紛争は頻発しており、プーチンは強引な軍事力で抑え込もうとしている。

日本政府の問題

このような世界の大国の狭間におかれている日本が、座視しているのはいかかなものだろうか？ 喫緊のコロナ対策においても、無策で右往左往している菅政権には国外情勢を云々する資格はないが、世界第3位の大国(?)の日本はこのまま世界に全く影響力のない小国になりさがってしまっているのだろうか。日本は、地政学的にも米中間の調整をする立場にあるが、残念ながら否と言わざるを得ない。



難民・移民の受入拒否問題

日本政府は、技能実習生の受入れはしているが、技能実習とは名ばかりで、期限付きの単純労働であり、弱体化した単純労働を補完するためであり、これこそ、東南アジア諸国民の人権を無視した施策である。

日本の難民受入れは、2019年で1万人以上の申請に対して、認定したのはわずか44名(0.4%)で、欧米先進国より3桁少ない現状である。これは、政府に真摯に取り組む政治的な意図がないということが最大の問題だが、一般的に日本人には、他民族を受け入れるだけの協調性がないということに起因しているような気がしている。海外の「日本人会」に見られる閉鎖性がその典型ではないかと思う。この件は、次号以降に私見を述べてみたい。

(写真の展出：ネットより)



《新シリーズの提案》

2018年6月より2020年12月号まで「戦争と平和！」シリーズとして会員26名の方々に過去の戦争体験や平和への思いを綴っていただきました。ありがとうございました。

私達は過去の戦争を教訓にして、これからの平和な世界を希求するために、これまでの「戦争と平和！」シリーズを発展的に解消し、新たなシリーズ「世界の平和を考える(仮題)」を展開していきたいと考えております。皆様の積極的な投稿をお願いいたします

